

コロナ禍後の運動会の態様についての一考察

— 変化する社会と教職の専門性 その14 —

向山 行雄

A Study on the Modes of Elementary School Sports Day after the COVID-19

— The Teaching Profession in a Changing Society Part14 —

MUKOUYAMA Yukio

要約

本稿は、「変化する社会と教職の専門性」について、2012年度から執筆する論考の第14作目に当たる。

2023年5月の新型コロナ5類移行に伴い、小学校の運動会は再び保護者等に公開されるようになった。しかし、コロナ禍前に比べて、運動会は簡素化された内容で実施される学校が多い。

本稿では、このような学校の実態やこれまでの小学校運動会の果たしてきた経緯、筆者の経験、運動会と地域社会にかかわりについて考察する。また、今後の小学校の運動会にかかわる筆者の提言を述べる。

キーワード：学校行事の目標、新型コロナ禍後の運動会の簡素化、学校応援団、泰明小学校の運動会、中教審の緊急提言、コロナ禍後の運動会にかかわる向山行雄の10の提言

はじめに

筆者は、2012年度以来、「変化する社会と教職の専門性」について、毎年論考を発表してきた。取り上げてきたテーマは次のとおりである⁽¹⁾。

- 2012年 東日本大震災への対応を手がかりとして —変化する社会と教職の専門性 その1— (以下サブタイトル略)
- 2013年 いじめ問題への対応を手がかりとして
- 2014年 近年の体罰問題についての一考察
- 2015年 いわゆる「学級崩壊」についての一考察
- 2016年 人口減少社会と学校教育
- 2017年 組体操問題と学校教育

- 2018年 大川小学校津波訴訟問題と学校教育
- 2018年 働き方改革と学校教育
- 2019年 熱中症問題と学校教育
- 2020年 小学校における教科担任制導入
- 2021年 いわゆる読解力低下問題と学校教育⁽²⁾
- 2022年 感染流行初期の新型コロナ感染症問題と学校教育 —変化する社会と教職の専門性 その12—
- 2023年 国家安全保障と学校教育 —変化する社会と教職の専門性 その13—

今次の「コロナ禍後の運動会の態様についての一考察」についても、いくつかの報道や通知、報

告書や文献等を解説しつつ、具体的な事例をもとにして教職の専門性について考察した。

1 コロナ禍と学校教育

(1) コロナ禍と学校行事

2020年3月2日から、新型コロナウイルス感染症対策のため、全国のほとんどの学校が休業となった。小学校の98.8%、中学校の99.0%、高校の99.0%が休業となり、同年5月下旬によりやく再開された。

その後も、コロナ禍での「三密回避」の生活が強いられ、学校の教育活動は大きく制限された。授業中の話し合い活動の回避、理科・音楽・家庭科等での実習の中止、給食時の私語禁止、休み時間の身体接触の制限など、小学校教育の根幹を成す「ふれあい」やコミュニケーション活動は、影を潜めた。

特に、大きな影響を受けたのが学校行事である。宿泊行事や遠足・社会科見学等の中止、運動会・学芸会・音楽会及び連合行事等の中止、卒業式や入学式の簡素化などの措置が行われた。

2021年になり、わずかな学校行事を再開する動きが出てきた。しかし、各学校では、感染防止と学校行事の実施という難しいかじ取りを迫られた。筆者が研究会の年間講師を務める東京下町のある小学校。保護者から運動会を再開してほしいという声と実施すべきではないという声に翻弄され、女性校長は判断に悩まされた。実施しても苦情が来る、実施しなくても苦情が来る。校長経験3年目で迎える、最難解の苦渋の判断場面だった。

2023年5月、新型コロナは第5類へと移行し、各学校の教育活動もほぼコロナ禍前の内容に戻りつつある。

そういう中で、コロナ禍前から大きく変質をした教育活動が小学校の運動会である。

(2) 現行学習指導要領での学校行事の扱い

2017年3月告示の小学校学習指導要領の特別活動の「学校行事」の目標は、次のように示されている⁽³⁾。

「全校又は学年の児童で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団へ

の所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」

ここで言う「第1の目標」とは、特別活動の目標である。すなわち「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団生活を自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や事故の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す」という内容である。

このように、「よりよい学校生活を築くための学校行事」であるが、「内容」の項目には、「学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行う」としている。そして、下記の5つの内容を示している。

○儀式的行事

○文化的行事

○健康安全・体育的行事

○遠足・集団宿泊的行事

○勤労生産・奉仕的行事

「健康安全・体育的行事」には、健康診断、交通安全教室、避難訓練、薬物乱用防止教室、球技大会、体力テスト、球技大会などがあるが、本稿で取り上げる運動会も含まれる。この行事の目標として、学習指導要領は「心身の健全な発達や健康の保持増進、事件や事故、災害等から身を守る安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感ある連帯感の涵養、体力の向上などに資するようにすること」と示す。

ここで注目すべきは、「規律ある集団行動の体得」という用語である。日常の教科学習でも、学習するための規律や団体生活をするための行動についての指導が一定程度行われる。しかし、それは教科の学習の直接の目標ではない。教師も、自覚的に実践しているとはいえない。

それに対して、特別活動の健康安全・体育的行事において、「規律ある集団行動の体得」を明示している意味は大きい。学齢期の「規律ある集団行動」の体験を通して、児童は集団の一員としての資質や能力を身に付ける。それが、長じてからの公民的資質の涵養や非常変災の際の集団避難活

動等の基礎となる。また、我が国の国民が他国から称賛される公共マナーの良さなどの土台にもなり得る。

（３）「社会に開かれた教育課程」の実現

今次学習指導要領では「総則」の前に、「前文」を初めて設けた。この前文において、「社会に開かれた教育課程」という考え方を示している。

今次学習指導要領は、2017年12月21日の中央教育審議会（以下中教審）答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」を踏まえて作成されたものである。この答申において、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有する方向性を示した。

今次学習指導要領は「前文」において、次のように述べる⁽⁴⁾。

「教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる」

今次学習指導要領は、これまでの「学校と地域社会との連携」という目標をさらに進化させ、「理念の共有」という高らかなスローガンを掲げた。変化の激しいこれからの時代を踏まえ、このスローガンを掲げた意義は大きい。しかし、「理念の共有」を実現するためには、難しさもある。

我が国の小学校は約18,000校、平均すると一つの小学校区に6,000余名の地域住民が生活する。その多くの地域住民は、小学校教育との直接的な関わりは多くない。たまの選挙で、学校の投票所に来る程度である。しかし、小学校教育への思いをそれぞれに持っている。誰しも、自らが小学校教育を通して現在があるのだから、郷愁やリスクト、あるいは反感など様々な思いや学校への要望を持つのは当然である。

住民Aは、小学校教育は基礎基本が根幹だと言う。住民Bはゆとりある生活で創造性を伸ばすべきだと主張する。住民Cは、外国と競合するためにはICTや外国語こそが重視されるべきだと自説を披歴する。住民Dは心身の健康づくりが人間形成の土台になると述べる。住民Eはあまり過大な要求はせず、学校が楽しいと思って通学してくれたらそれでいいと遠慮がちに話す。

そのどれもが、それなりの説得力のある「理念」である。地域住民は、自らの学校教育の体験やその後の社会生活、自分の子供や孫への期待値などを含めて「理念」を抱く。

このように、多様な「理念」を抱く地域と学校が、教育理念を「共有」するためには、難しいマネジメントが必須である。

小学校では、2018年4月から新学習指導要領の全面実施、中学校では2019年4月から全面実施となった。小学校では、全面実施2年目となり、ようやく「社会に開かれた教育課程」のもとに、地域社会と連携して教育活動を推進しようとする時期にコロナ禍に襲われた。

学校の教育活動を地域に示すための最大のイベントが運動会である。教室で行う授業参観、体育館で行う学芸会や音楽会と比べても、校庭で行う運動会は、圧倒的多数の保護者や地域住民、学校関係者や同窓生、未就学児やその親などに「学校の今」を示す絶好の機会である。

かつて、山口（1990）は、学校行事について次のように述べた⁽⁵⁾。

「行事の性格は、活動の集団性、総合性、非日常性によって特徴づけられる。学校生活における行事の意味について考える場合には、とりわけ非日常性という性格に注目する必要がある。行事は、日常的な生活活動とは、時間的、空間的に異なる独自の生活世界を創造する」

「社会に開かれた教育課程」の具現化のためにも、非日常の盛り上がりを持つ運動会を公開することは、年に一度のチャンスである。それが、コロナ禍で中止となった。

2 伝統的な運動会の開催

(1) 筆者の小学校時代の運動会

浜野(2004)は、我が国の小学校の運動会について、「明治17年には皆無であった小学校参加の運動会が、明治18年ころから見られるようになり、明治19年には大幅に増加した」と記し、「明治期の小学校教育において、運動会という行事は教育上重要な役割を果たしていたと考えられる」と述べる⁽⁶⁾。

その後、運動会は、先の大戦中に国威発揚の場としても行われた。

筆者は、1957年品川区立旗台小学校に入学した。小学生時代の運動会を断片的に記憶している。小学校2年生の時は紅白リレーの選手に選ばれ、同級生の下校後に特別練習をした。6年生の鼓笛隊パレードは中太鼓を担当したが、夏季休業中も音楽室で猛特訓をした。運動会当日は、児童会保健委員長として、養護の上野先生の補助として救護本部に詰めていた。

運動会前日は、近所の雑貨店で「はだし足袋」を購入。運動靴より足にフィットして、走りやすかった。母親は、朝早くから昼食の準備。初物の青いミカンや栗なども添えられていた。早朝、開会を告げる号砲が自宅に聞こえてきて、いそいそと学校に向かう。学校正門付近には、綿あめやお好み焼きなどの露天商が開店準備。児童に混じって、続々と保護者や地域住民が参集する。

運動会を終えても高揚感が続く。徒競走1等賞の赤リボンと保健係の緑のリボンを付けた体操着のまま、近所の八幡神社で級友たちと遊ぶ。まさに、祝祭の日であった。

1958年に学習指導要領が改訂され、従来の「教科以外の活動」が廃止され、「特別教育活動」と「学校行事等」になった。

山崎、南本(2017)によれば、「学校行事等」の目標は、「学校が計画し実施する活動として、児童の心身の健全な発達を図り、合わせて学校生活の充実と発展に資する、とあり、その内容は、儀式、学芸的行事、保健体育的行事、遠足、学校給食となっている」⁽⁷⁾

筆者の小学生時代の運動会は、学習指導要領の「学校行事等」の保健体育的行事として行われたものである。

(2) 筆者の学級担任時代の運動会

筆者は、1974年に、大田区立大森第一小学校で教員生活をスタートさせた。毎年、新学期早々の4月下旬から5月末に向けての運動会練習が始まる。新卒2年目で6年担任。音楽担当教諭との鼓笛隊パレード指導や、組体操指導に傾注した。

運動会終了後は、体育館でPTA主催の懇親会。会場の体育館が満杯になるほど多数の保護者と教職員で酒宴が行われた。各学年から演目の苦勞話が披露され会場が盛り上がった。その後は、多くの教員とPTA役員で二次会へ繰り出す。

1977年に同区立入新井第一小学校に転任。ほとんど高学年を担当することが多く、ここでも鼓笛隊パレードと組体操指導に熱中した。9月下旬の運動会に向けて、夏季休業中から練習を始めた。運動会当日は会場から万雷の拍手を得る。涙を流す保護者も多く、指導担当者としての満足感に浸る。卒業生も、後輩たちの演技を見るために多数駆けつけ、自分たちの演技と比較した。

1977年に学習指導要領が改訂され、1967年改訂と同様に「特別活動」は「児童活動」「学校行事」「学級指導」で構成された。また、小学校の場合には、「学校行事」をめぐって、行事の名称が改められた。例えば、儀式が儀式的行事に、保健体育的行事が体育的行事に、遠足的行事が遠足・旅行的行事に、安全指導的行事が保健・安全的行事に改められた。そして、学芸的行事は従来のままで、勤労・生産的行事が新たに加えられた⁽⁸⁾。

筆者は、1974年から1989年までの16年間を小学校教諭として過ごした。1年間の最大の教育活動は運動会であり、その準備と指導のために多くの時間を傾注した。

そのうち、1986年から1989年の港区立芝小学校時代には3年間、体育主任として運動会の責任者を務め、全校の運動会マネジメントを経験した。学級担任と教務主任をしながらも、責任者として各学年の円滑な練習や全教職員の係分担の遂行、外部との渉外等の仕事を進める経験は、のちの管

理職としての職能向上につながった。

（３）筆者の教育委員会勤務時代の運動会

その後、1990年代の10年間、指導行政に従事した。指導主事として勤務した文京区教育委員会時代。学校の運動会との関わりは、教育課程実施届け出の確認や、運動会練習等の事故報告などの受理が主業務であった。時には、PTA競技の綱引きの大綱が切れて負傷者を出したとか中学校の体育祭に他校の生徒が押しかけ、トラブルになった等の報告があった。

文京区では、全ての小学校中学校幼稚園の運動会に遠藤正則区長と富田教育長が公用車で訪問し、会場の観客に挨拶をするのが恒例であった。

例えば、1991年9月29日（日）には区内で10校園の運動会が開催された。遠藤区長は、一日かけてすべての運動会を回った。多分に地域住民に声掛けをしたいという一面もあるが、高齢の区長にとっては骨の折れる業務である。

筆者は、区長らとは別に区役所の自転車で、坂の多い文京区の街をかけ回る。筆者の当時の手帳によれば、同日には、明化小（8時35分～）林町小（9時15分～）籠町小・籠町幼（9時45分～）千駄木幼（10時30分～）昭和小（11時10分～）の予定で、午前中に5校の運動会を訪問している。

この計画では、一つの小学校に滞在する時間は短く、管理職に挨拶をして、1つか2つの競技種目を参観して退出している。しかし、わずかな滞在時間であるが、児童の演技や応援、児童招集や集合、教職員の指揮等から、運動会指導にかかわる多くの知見を得ることができた。また、同日に多数の学校を回ること、各学校の運動会の質も比較できた。これは、教育委員会指導主事にとって有益な機会であった。

同様に筆者の手帳によれば、品川区教育委員会指導課長時代の1998年5月31日（日）の、運動会訪問は次の予定になっている。品川区役所を部下の運転する公用車で午前8時20分に出発。御殿山小、第四日野小、小山小、荏原第六中、原小、旗台小、延山小、源氏前小、大原小を回っている。最初の御殿山小は、開会式前の児童集合の時。最後の大原小学校に到着したのは、午後3時過ぎの

閉会式の時だった。

1日で9校を回るので滞在時間は短い、教職員名簿を片手に校長に教職員の氏名を尋ね、その姿をとらえるようにした。

教育委員会指導課長としての参観では、校長の立ち居振る舞い、教頭の補佐、体育主任の役割、PTAの接遇、校内の安全確保、保護者参観席の配置、地域や学校関係者の招聘、教職員の連携、校旗や国旗の扱い、来賓への昼食配布、受付や誘導、校内掲示等、わずかな滞在時間でも、その学校の立地のベースとなる状況が確認できた。人事行政に携わる者として、まさに「百聞は一見に如かず」であった。

これらの指導主事、指導課長としての運動会訪問の経験を、後の校長時代の11回の運動会運営に生かすことができた。

（４）筆者の校長時代の運動会

筆者は、2000年に葛飾区立清和小学校長となり、2010年まで11年間校長職を務めた。11回の運動会のうち6回も雨にたたられ、「雨校長」の称号を甘受した。

中央区立泰明小学校の2010年10月9日（土）開催の運動会実施計画の目標は次のとおりである。

- 平素の体育学習の成果を発表し、運動することの大切さを味わわせる
- 正しい競争や協力の経験を通して、連帯感や社会生活に必要な態度を育てる
- 学校の歴史を振り返り、先輩や地域の人たちに感謝する態度を育てる

ここで注目すべきは、3つ目の目標である。この目標は、運動会とは直接関係が内容に見える。しかし、後述するように運動会の持つ祝祭的な機能と密接に関係する目標となっている。

種目別の配当時間で、「表現・模倣・リズム」は幼稚園6分間、1年から5年は7分間、6年は15分間配当する。この時間内に、各学年は表現の種目を演じる。6年生の持ち時間が長いのは、組体操のためである。

児童は、体育着のほかに、表現運動のための衣装、泰明音頭のための半纏やハチマキ、他に金管バンドは標準服、応援団は団の衣装を準備する。

教職員はそろいの泰明Tシャツ、PTA各部は、それぞれの部のカラーのTシャツ、PTA執行部は専用のTシャツを着用。校庭は、様々なユニフォームで満艦飾となる。

フルスペックの運動会の時程は次のとおり。

午前 6 時00分	校長・副校長出勤
6 時30分	管理職と体育主任で開催判断
6 時40分	開催についてHPに掲示
7 時00分	教職員出勤 係児童と準備開始
7 時35分	児童登校
7 時45分	保護者用正門開放
8 時20分	教職員打ち合わせ
8 時30分	児童校庭集合
8 時35分	入場行進開始
12時00分	午前の部終了 幼稚園児終了
昼食休憩	児童と保護者は校庭や体育館等で弁当 教職員は給食室調理の昼食 校長は来賓との昼食懇談
午後 1 時00分	午後の部開始
3 時10分	終了 片付け開始（保護者協力）
3 時50分	片付け終了
4 時00分	PTA役員と運動会反省会
5 時30分	教職員懇親会開始

文字通り、朝から晩までの「一年中で最も長い日」が続く。校長も教職員も1年中最もうまい酒を飲む。

筆者の小学校時代から教員や校長時代の運動会は、学校や地域の祝祭の日であった。まさに、運動会は年に一度の「祭りの日」として、児童や保護者、地域住民の〈ハレの日〉であったと言える。

佐々木（2007）は、公教育における祝祭の持つ意義について次のように言う⁽⁹⁾。

「公教育においては、祝祭を特定の宗教の教育によってではなく、感謝や祈りといかに結合するかが課題であるが、それは大人や教師の意識によって可能であろう。祝祭は、それ自身に深く没入することによって、自分は1人ではなく、仲間がいる、親がいる、家族がいる、身近に親味になってくれる人がいるという思いや自分が親、祖父母、祖先、さらには国家や文化、伝統と繋がっ

ているという思いや実感、体感する場であり、1人ではできないことに参加することによって、一体感、達成感、高揚感、充実感を通して人と繋がり、共同体意識を持つことのできる場なのである」

そして、人間形成の場としての役割として、学校の祝祭の意義について、次のように続ける⁽¹⁰⁾。「大人として、人間として、場と役割を弁えた振る舞いができる人間としての総合力が必要であるが、祝祭はそのような資質を育む場を提供するのである。また、学校の祝祭においては、下級生は、上級生の晴れの姿に憧れ、やがて自分がその場に立ったとき、上級生の姿を事故に重ね合わせながら振る舞うのであるが、祝祭はそのような身近なモデルを与える絶好の場としても機能している」

フルスペックの運動会では、児童の学年競技以外にも多数の演出が施される。

泰明小学校の運動会の開会式の主な内容は次のとおりである。

- 金管バンド部によるファンファーレ
- 優勝旗を先頭に各学年の入場行進
- 司会の副校長の開式宣言
- 国旗・校旗掲揚と国歌斉唱
- 優勝旗、準優勝杯返還
- 校長の挨拶
- PTA会長の話
- 審判長の競技上の注意
- 1年児童の始めの言葉
- 運動会の歌の合唱
- 副校長の閉式宣言
- 全校準備運動
- 全校応援合戦

このようなセレモニーを約30分程度実施して、各学年の競技になる。学年種目以外の競技は次のとおりである。

- 低学年紅白リレー
- 高学年紅白リレー
- 全校競技 大玉送り
- 全校リズム 半纏着用で泰明音頭
- PTA競技

- 教職員競技
- 来賓競技
- 同窓生競技
- 未就園児競技

閉会式の主な内容は次のとおりである。

- 入場行進
- 整理運動
- 司会の副校長による開式宣言
- 得点の発表
- 優勝旗・準優勝杯授与
- 参加賞授与
- 校長の講評
- 6年児童の終わりの言葉
- 校歌斉唱
- 来賓よる万歳三唱
- 国旗・校旗降納
- 副校長の閉式宣言
- 体育主任から事務連絡

各学年の出番は、徒競走、表現、団体競技の3本である。その他に、これだけの活動がある。

とかく、我が国の運動会の開閉会式について「長すぎる」とか「形式的である」との批判もある。しかし、観客にとっては、開閉会式や全校行事の人气が高いことも事実である。オリンピックでも、開会式の入場券が一番人気であることと軌を一にする。

2011年3月発行の卒業アルバム。2学級70名の卒業生のうち、17名が「思い出」として運動会を取り上げた。これは小学校時代の各種の「思い出」の第一位である。ちなみに第2位は、6年の移動教室や5年の臨海学校などの宿泊行事であり、15名が取り上げた。

児童の卒業アルバムの一節⁽¹¹⁾。

S児「僕が、この学校で学んだ一番大切な事は、あきらめない事の大切さだ。100回失敗しても、100回起き上がる。1,000回失敗しても、1,000回立ち上がる。僕は、この事を自分に言い聞かしていた……。そもそもあきらめない事とは、その問題を一目見た瞬間、『無理』と決めつけてしまう事だ。しかし、その問題に真正面からぶつかり、死にもの狂いでチャレンジしてそれで

もできなかったというのは、『あきらめる』とはわけが違う。例えば運動会の組体操だ。これは難しい技になると、なかなかうまくいかず苦戦していた。しかし、あきらめずにやっていくとだんだん組体操が完成に近づいてきた。これは技量のあるない体力のあるないではなく、あきらめずにやった精神と努力の賜物だと思う。これから、どんなつまらない事でも全力をつくし、どんな嫌な事でも逃げないで頑張りたいと思う」

I児「6年生で一番思い出に残っているのは、運動会の組体操です。9月の照りつける太陽の下、組体操の練習が始まりました。最初は上手にできなかった2人技や3人技も練習を積み重ねていくごとに上達していきました。そして本番では大成功を収めて大きな拍手をもらいました。

今、組体操のことを振り返ってみると、今まで築いてきた友達との絆、クラスの絆、先生方との絆、両親との絆を1番最後の全員での3段ピラミッドで表現できたと思います。これは、みんなの気持ちが一つになったあの瞬間にしかできなかったと思います。〈絆〉とは、「たち切ることでできないつながり」という意味があります。1年生から6年生までに、みんなで作り上げてきた絆は、絶対に切れないと思います。卒業しても、この絆を大切にしていきたいと思っています。」

G児「一番私の心の中で印象深く残っているものは、運動会の組体操である。〈絆〉という言葉テーマにし、たくさんの人々を感動させられる演技をした。一目見ると、自分には絶対できないと思った技もあるし、いくら練習してもなかなかできない技もあった。そんな時は家で、時間を見つけて練習したり、休み時間に練習したりもした。

すると、できなかった技もできるようになり、納得いく演技ができるようになっていった。そして本番、少しきん張し、少ししみない不思議な気持ちで本番が始まった。すべての技で、みながそろったし、すべての技が納得が

いって終わることができた。涙ぐんでいる人もいたし、思わず涙があふれ出た人もたくさんいた。私も、これが最後の運動会なんだと思うと、少し悲しくなったし、そのことで「卒業」という言葉が身近に感じられた。

でも、私はこれが最後だという悲しみより、十分な満足感のほうが大きかった。だから泣けなかった。それよりもむしろ笑いが出た。止めようと思っても止められない笑みがこぼれた。それは大事だと思える友達がいるからだと思うし、そんな大事だと思える友達と最高の演技ができたからだと思う。私は、そんな大事だと思える友達を中学に行っても作りたいと思うし、作ろうと思う」

S 児は、無理と思う事でも「あきらめない」という気持ちが、技量を上回ると述べる。I 児は、組体操の成功は、友達、先生、家族の「絆」があったからだと言う。G 児は時間を見つけて、家庭でも学校でも練習したと言う。

これらの作文は、それぞれの児童の個人的な感想である。運動会や中学校入学試験を終えて、卒業間近の時期に、自身の小学校生活を振り返って書いた作文である。そのため、多分に感傷的な表現になっている面もあるが、冷静に小学校生活を見つめているともいえる。

G 児の「時間を見つけて家でも練習した」という行為がいかに大変だったかと推察する。泰明小学校のほとんどの児童は、中学受験のために平日の夜遅くまで進学教室に通い、土曜日、日曜日も5時間以上机に向かう。全国の小学校6年生の平均学習強時間の数倍の時間である。G 児は、忙しい毎日の中で、時間を見つけて家庭練習をした。また中学校受験生活の中で唯一のオアシスの時間である休み時間にも練習したとある。これらの努力がどれだけしんどいことか、4年間をともにした筆者には共感的に理解できる。

3 コロナ禍後運動会の開催

(1) 泰明小学校の運動会

新型コロナ5類移行後、しだいに保護者参観も可能な運動会が再開されるようになった。

2023年9月30日(土)開催の泰明小学校の運動会。小学校「開校145周年、幼稚園開園70周年の記念の運動会であり、スローガンは「みんなで協力 歴史をつなごう 泰明小」とある。

運動会プログラムは次のとおりである。

I 開会式(8時30分～)

- 金管バンド ファンファーレ
- 学校長の話
- はじめの言葉(1年)
- 運動会の歌
- 選手宣誓

II 競技 低学年(8時45分～)

- 1年表現
- 2年表現
- 1年徒競走
- 2年徒競走
- 1. 2年団体競技

III 競技 中学年(9時45分～)

種目は低学年と同様

IV 競技 高学年(10時45分～)

種目は低学年と同様

V 閉会式(12時05分～)

- 学校長の話
- PTA会長挨拶
- 児童代表の言葉
- 校歌斉唱

プログラムを見ると、昨年度と比べて2学年合同の団体種目を復活させている。

その他の特徴は、コロナ禍と同様で、以下のとおりである。

- 入場行進は中止
- 開閉会式を簡素化
- 国歌斉唱や優勝旗返還は中止
- 紅白リレーは中止
- 金管バンドパレードは中止
- 応援団や応援合戦は中止
- 全校競技や全校表現は中止
- 職員競技、PTA競技、来賓競技等は中止
- 同窓生競技や未就学児競技は中止
- 親子お弁当昼食は中止

つまり、「祝祭としての運動会」の色彩をなく

し、「体育学習発表会」のイメージを強くしている。また、午前中開催として「教職員の働き方改革」を具現化している。

この開催方法は、2023年度の全国の小学校運動会の標準的な態様であると推察される。

（2）墨田区立立花吾妻の森小学校の運動会

新型コロナの5類移行に伴い、2023年度の運動会について、フルスペックの形式に戻せるようになった。しかし、各小学校では、児童の実態や保護者のニーズ、地域の実態などを踏まえて、慎重に検討を重ねてきている。

校長は様々な情報を得て、最終的な決断を促すことになる。しかし、最終判断までに逡巡もある。筆者が校内研究会の年間講師を務める墨田区立立花吾妻の森小学校。JR総武線亀戸駅近くにある、住宅地の小学校である。児童数368名で通常の学級12学級と、特別支援学級3学級の編制。

同校の2023年6月1日の「学校だより」の向井一郎校長の巻頭言⁽¹²⁾。

「もうすぐ運動会 ―シン・運動会の開催―

新型コロナ感染症が広がり始めた2020年、その前から『運動会』の在り方についての議論が始まっていました。春であっても秋であっても、運動会を朝から午後まで行うことが子供たちに負担をかけているのではないかというものでした。各地で熱中症で倒れる児童生徒が続出し、運動会本番でも出番を待つ児童に霧吹きで水を吹きかけて体温を下げるようにしたり、演技後に体育館を冷房を全開にして、そこで体を休めたり、いろいろな工夫をし始めた頃でした。種目や時間、会場の設営方法などを見直そうとしていたところに、コロナ感染症の流行が始まったのです。ですから、コロナ後の『運動会』こそが、本来ならば2020年に行うはずだった『シン運動会』なのです。かつての運動会は、地域のお祭りのような場でもありました。春秋の祭りという意味もあり、盛大なものだったと思います。

今年度、本校の「シン運動会」は、「体育発表会」という名称で実施します。コロナ対策中に行った「発表会」は保護者の皆さんの応援時間を制限し、入れ替え制にしたため子供たちの演技を

目の前で見ることができたというプラスの面もありました。ただ、子供たちが互いの学年発表を見合うことができませんでした。今年度は、そこを前進させ、低学年の部と高学年の部に分け、その枠組みの中では子供たちも互いに見合い、保護者の皆様にもこれまでの人数以上ご来場いただけるようにしました。今年度の形式を基本とし、来年度の開催についても工夫を加えていきたいと考えています。来年度は、全校児童が校庭に集まり、紅白で応援団員の声が響きあうようなものにできるように工夫していきます」

このように、同校ではコロナ禍前から、体育発表会に移行する計画を立てていた。そしてコロナ禍後の運動会では、特に熱中症対策の観点から、運動会の簡素化を図っている。また、児童席にもテントを設営したり、従来の敬老席を「思いやり席」のテントとして、高齢者以外の体調不良者にも開放したりしている。

なお、同校は体育発表会を土曜参観日として位置付けているが、翌週の月曜日は通常の授業日としていて、振替休業日は設定していない。これは年間の授業時数確保のためである。なお、教職員は夏季休業中に代替休暇を取得する。

（3）各学校の運動会の開催の態様

新型コロナ5類移行後の2023年の運動会の態様は下記のとおりである。以下の14校は、筆者の知人を通して、東京都、神奈川県、千葉県などの小学校の運動会プログラムを集めたものである。

表の15校で見ると、多くの学校が午前開催である。そのため、開閉会式の簡素化や全校競技、応援合戦、教職員競技やPTA競技などを中止している。その一方で、紅白リレーや選抜リレーについては、かなりの学校で復活をさせている。

M区立S小学校は、東京湾ウォーターフロントに立地する児童数1,000名を超える大規模校である。同校では、運動会を午前8時30分から午後3時30分までの時間帯で開催している。昨年度は、全校を2分割しての実施だが、2023年度は全校一堂に会しての開催である。応援合戦や紅白リレー、優勝旗・準優勝杯返還、得点発表、校歌斉唱などのメニューも復活させている。

学校名	月日	開催時間	全校競技	開閉会式	備考
M区S小	5.27	全日	あり	あり	完全復活
K区H小	6.3	午前	なし	あり	リレー
O区H小	6.3	午後1時 25分まで	あり	あり	リレー
I区J小	10.28	午前	なし	なし	なし
E区S小	6.3	午後1時 35分まで	なし	あり	リレー
N区T小	10.7	午前	なし	あり	
T市N小	9.30	午前	なし	あり	リレー
M市H小	10.14	午前	なし	開会式のみ	
K市T小	9.30	午前	なし	あり	応援
K市D小	6.3	午前	なし	始めの会	体育学習 発表会
K市M小	10.21	午前	なし	あり	リレー
A市O小	5.28	午後2時 頃まで	なし	はじめの式 終わりの式	徒競走なし
Y市N小	10.21	午前	なし	あり	棒運び
H市K小	不明	午前	あり	あり	未就学児競技
E区N小	9.30	午後1時 40分まで	あり	あり	リレー

それに対して、東京西部のN区立T小学校では、午前中に、全校を3部制で実施している。各学年の種目は徒競走と表現のみで、学年の団体競技は実施しない。また、応援合戦や紅白リレー、全校種目などもない。開会式も、1年児童の言葉とスローガン発表のみである。極めて簡素化した運動会と言える。

このように、15校の小学校では、全体として簡素化の方向にある。その中で、しだいに以前の運動会に戻つつある傾向と簡素化したままの態様で実施する傾向がある。今後、各学校が地域の実態や他校の状況等を踏まえて、検討を進めるものと推察される。

なお、NHKが東京都内の300校の公立小学校を対象にした調査によれば、2023年度の運動会について「午前中で終わり 70.7%」「お昼を挟み午後まで 26.3%」「その他 3.0%」であった⁽¹³⁾。

4 学校働き方改革と運動会

(1) 中教審の緊急提言

2023年8月、中教審初等中等教育分科会「質の高い教師の確保特別部会」は、「教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策 ― 教師の専門性の向上と持続可能な教育環境の構築を目指して―」の提言を出した⁽¹⁴⁾。

緊急提言の内容は次のとおりである。

- 学校・教師が担う業務の適正化の一層の推進
- 学校における働き方改革の実効性の向上等
- 持続可能な勤務環境整備等の支援の充実

このうち、業務の適正化を進めるため、各学校における授業時数や学校行事の在り方の見直しを求めている。具体的には、2024年に向けて、授業時数を点検した上で、以下の観点で教育課程の編成に臨む必要があるとしている。

- 児童生徒の学習状況や教職員の勤務の状況
- 当該校における近年の休校や学級閉鎖等の状況
- 教育課程の編成・実施における授業時数の配当や運用の工夫が可能かどうか
- 指導体制の見直し・改善が必要かどうか

学校行事の見直しについて、提言は次のように述べる。

学校行事に係る負担の軽減に関しては、運動会での開会式の簡素化や全体行進を省略することで全体での練習時間を減らしたり、入学式・卒業式における慣例的・形式的な要素を見直すことで式典時間を短縮したりする等の取組例もある。

このため、学校は、これらを参考としつつ、それぞれの学校行事の教育的価値を検討し、学校としての体裁を保つためのものや前例のみにとらわれて慣例的に行っている部分をやめ、教育上真に必要とされるものに精選することや、より充実した学校行事にするために行事間の関連や統合を図ることなど、学校行事の精選・重点化を図る必要がある。

また、学校行事の事前準備・運営に当って、教員業務支援員等と連携するマネジメントを徹底することや準備の簡素化、省力化等を進める必要がある。

本提言は、教職員の超過勤務の改善が停滞していることや、近年の教員採用倍率の低下、教員不足、教職がブラックという風潮のまん延、教員の精神疾患の増加等の事態を踏まえて、中教審が緊急的に提言したものである。

学校関係者の一人として、中教審が現状を改善するための議論、緊急提言を発出した努力を多とする。様々な意見のある中で、学校行事の見直しについて具体的な例を挙げた勇気も、元中教審初等中等教育分科会の一員として活動した者として評価したい。

(2) 例示された項目についての懸念

その上で、「運動会の全体行進の省略」と「学校として体裁を保つためのもの」という表記に懸念を抱く。

前述したように、現行学習指導要領の健康安全・体育的行事の目標は「規律ある集団行動の体得」にある。日常の教科の学習では、「規律ある集団行動」を直接指導できる場面は少ない。

避難訓練は「健康安全・体育的行事」に含まれる学校行事であり、東京都の学校では毎月行われる。実際の場面では、教室から避難場所へ「おかし」（おさない・かけない・しゃべらない）の合言葉で整然とした行動をとるように指導することもある。しかし、この場合、避難する一名一名の児童は列を乱さぬ限り、一定の自由さのもとに早足で行動できる。「規律ある集団行動」とは言い難い。

その点で、全校児童による運動会の入場行進は、「規律ある集団行動」をする上で、千載一遇の機会である。入場行進は、難度の高い学習である。前の人と横の人の位置関係を把握し、行進曲に合わせて、自分のルート上を行進する。簡単そうに見えるが小学生児童にとっては、ハードルの高い内容である。また、学年の発達年齢による差異や、日ごろの学級経営の様子も表出する。さらに、全体指導をする教師の力量や各学年を統轄する担任の指導力も明白になる。何よりも、その学校の総合的な教育力が運動会の入場行進で明確になる。

保護者や児童自身、若手教師たちは、自校の入場行進しか見ていないので、その完成度についての評価をしにくい。だが、退職校長やOB教員、近隣の校長、教育委員会関係者などは、集団行動のレベルなどの違いに気付くことができる。

運動会の入場行進は、一見無駄に見えるし、「学校としての体裁を保つため」の活動のように

見える。今回の提言の事例に取り上げられた理由もわからぬではない。しかし、小学校の運動会における入場行進の廃止は、今日の学校教育の大きなねらいの一つである「社会の一員としての資質」の形成に、マイナスの影響をもたらす。

多様性の時代と言われ、個別最適化の学習の進展で、筆者は、「規律ある集団行動」の資質育成が以前より重要になっていると考える。今回の提言は、「運動会の集団行進」を例示したが、これを曲解して、難度の高い内容を放棄したら、やがて、その負の影響はボデイブローのように効いてくると懸念する。

(3) 学校の働き方改革と運動会の態様

コロナ禍前の運動会では、学級担任はいくつもの業務を担当した。自分の学年の種目（表現、徒競走、団体種目）の指導の他に、会場係、放送係等の業務。そして、特別種目の担当である。

特別種目として、開閉会式、入場行進指導、全校表現指導、応援団指導、紅白リレー指導、金管バンド（鼓笛隊パレード）指導などがあるが、いずれも一定の負担になる。筆者の勤務した学校では、応援団指導は早朝練習、紅白リレー指導は給食配膳時間中、鼓笛隊パレードは放課後練習となることが多かった。

フルスペックのかつてのような運動会を復活させようとした場合、標準的な12学級程度の中規模校では指導者の割り当てに悩むものと推察する。初任者や産休育休代替講師、病弱者や指導力不足教師は、自学年の種目の指導で手一杯であろう。そうなると一部の教師がそれらの役割を担当することになり、その教師の業務量がさらに増加する。

また、コロナ禍3年間で、これまでの運動会が実施できなかったため、その学校の伝統的な指導体制が継続できないという事態も発生する。校長や副校長（教頭）、体育主任も、3年間の余白の影響で、細部にわたる運営のマネジメントの継承が十分でない。それゆえ、従来の運動会に戻す覚悟ができずに、無難な運動会運営をする傾向になる。

運動会の簡素化というスローガンは「錦の御旗」である。三密回避、児童の負担軽減、授業時

数確保、熱中症対策等、理由はいくらで上げられる。そこに、学校の働き方改革という中教審のお墨付きがあれば、鬼に金棒である。

こうして、我が国の伝統的な運動会は、次第に変質していく。それが公教育の脆弱さにつながり、国益を損ねるという怖さを、誰も指摘しない。

5 むすび

(1) 簡素化された運動会と参観者の縮小

学校は、多くの人びとに支えられて、その機能を発揮することができる。各学校には、「学校応援団」とも言うべき人々がいる。学校評議員、地域の町会関係者、議員、同窓生、教育委員や事務局職員、校内研究の講師、外部評価委員、民生児童委員や保護司、児童館などの関係機関、郵便局や交番、コンビニ、学校の元校長やOB、PTA役員OB、地元の中学校や保育所・幼稚園、学校ボランティア、地域協力者、出入り業者など、多様な人々がいる。

教職員は、わずか数年間の勤務で、学校を異動するが、地域住民はずっとその場所にとどまる。私たち学校関係者は、その重みを認識しなければならない。

2004年度から、葛飾区立清和小学校で放課後子供教室（わくわくチャレンジ教室）を開設することになった。筆者は校長として、2004年3月に、会場責任者として元PTA会長のB氏に依頼した。B氏は現役の企業経営者でありながら、その担当を引き受けてくれた。

筆者は依頼しておきながら、同年4月に同校から異動した。それにもかかわらず、2024年6月現在、B氏はいまだに、その担当を続けてくれている。わずか4年間在籍した校長の依頼を、20年間も継続して務めてくれているB氏は、まさに学校応援団である。

年に一度の運動会は、学区応援団が集う集落の祭りであった。例えば東京都八丈島は、かつて5つの小学校が毎年11月3日に全島を上げて運動会を実施していた。運動会終了後は、各集落が祝宴を催す。校長とPTA会長は、学区域内の10数か

所の集落を回って懇親を深める。

泰明小学校の運動会でも、多数の来賓が参観に訪れた。昼食休憩時や運動会終了後は来賓と懇談し、学校への理解と協力を投げかける。学校応援団の再確認の場であった。

さて、コロナ禍後の簡素な運動会に、これまでの来賓は参加するであろうか。少なくとも筆者は忙しい時間を割いてまで、校長OBとして出かけようとは思わない。おそらく、どこの学校でも、学校応援団となる人々の参観は減少すると考える。

ここに、簡素化された運動会の陥穽がある。学校の都合で縮小した運動会を学校応援団がどのように受け止めるのか、この数年間の学校の説明責任が問われる。

(2) 今後の運動会についての向山の10の提言

1点目は特別活動における健康安全・体育的行事の目標を再確認することである。コロナ禍後の縮小した運動会では、ともすると精選にのみ目が奪われがちになる。その結果、特別活動における学校行事としての実施なのか、体育の授業の公開なのか判然としなくなる。仮に、体育学習会として運動会をするのなら、他日、「体育的行事」を実施するのか、それはどのような活動か、「規律ある集団行動」の目標をどう達成するのか明らかにしなければならない。

2点目は、自分の学校の運動会の歴史を学ぶことである。学校保管の運動会関係の書類やPTA広報誌アルバムなどを基にして、過去10年間程度の系譜をたどる。特に、開閉会式や特別種目、来賓等の出席表から、運動会が地域社会で果たしてきた「祝祭機能」について明らかにする。もし、祝祭機能を廃止するのなら、他の教育活動で代替するのか、それともしないのか検討すべきである。

久保田（2023）は、「小学校におけるコロナ禍の運動会・球技大会の中止・縮小は、非認知能力の高さや友達と遊ぶ頻度、心身の健康に負の関連を示すことが報告されている。ここから、コロナ禍における学校行事の中止や縮小は子どもの発達に負の影響を与えると予想される」と述べる⁽¹⁵⁾。

3点目は、働き方改革と教育活動の影響を再検

討することである。近年の教員の超過勤務の状況や教職が「ブラック」であるという風評は、学校の円滑な運営を進める上で憂うべき事態である。筆者は、先年「教職員の働き方改革と学校教育」という論文で、「教員の働き方改革についての16の提言」をまとめた⁽¹⁶⁾。

その中で、「学校の聖性の復権」を取り上げた。世間の学校を見る目に変化して、学校が「平場」に降りてきてしまったことで、学校への無理難題要求が増加してしまった。難度の高い保護者対応の影響が、学校の多忙感の一員となった。

働き方改革の面から運動会を簡素化する際には、その点を考慮する必要がある。「平場」に降りた、高揚感も祝祭の非日常性も乏しい運動会は、「学校の聖性」構築の果実を生まない。

教職員の負担軽減というメリットと、学校の聖性構築の弱体化というデメリットを、総合的に分析する必要がある。

4点目は、児童生徒の自己実現の機会の検証である。学校という存在は、児童生徒の「将来に向けた資質・能力の育成」と「現在の生活の充実」にある。コロナ禍で、学校は「現在の生活の充実」が十分に実践できないつらさを体験した。児童生徒も、その不幸を甘受した。その負の影響は不登校児童生徒の増加等の数字に表出した。

フルスペックの運動会では、学年種目以外にも応援合戦、紅白リレー、全校競技、係活動、ポスター作り、高齢者への招待状作成、感想文の執筆など、多彩な活動が用意されている。校庭の万国旗、紅白チームのマスコットやスローガン掲示、閉会式での得点発表、昼食の親子弁当、参加賞授与など祝祭的な要素も加えられている。

たいていの児童生徒は、いずれかの場面での活動に満足感を得る。メニューが多彩なほうが、満足度を得る機会は多くなる。

簡素化された運動会では、自己実現の機会は大きく減少すると予想される。もし減少すると予測したのなら、年間を通して他の代替的な教育活動を準備する必要がある。しかし、運動会と同等に、多様な機会を保障する教育活動を展開するのは、相応のアイデアと覚悟が必要であろう。

5点目は、学校評議員やPTA役員との意見交流で、適切な実施方法を検討することである。前述したとおり、学校の教職員は数年たてば異動する。コロナ禍3年間を経て、コロナ前のフルスペックの運動会を推進した古参の教職員の多くは異動したり退職したりした。PTA役員の多くも退任した。現在の学校の中心的なメンバーは、コロナ禍前には当該校に着任して間もない教職員である。当該校の運動会の歴史的な系譜も理解しないうちにコロナ禍になり、運動会の中止や制限の事態になった。

したがって、当該校の運動会についての実績や成果、運営上の工夫などについて詳らかではない。それゆえ、外部の意見を聞いて、運動会の在り方について多角的多面的に意見交流をすることが大切である。

6点目は、「学校応援団」の維持と拡大について、志向することである。学校は、様々な人々の支えがあって運営される。学校は、支援してくれる人々に教育活動を公開して、理解と協力を呼びかける必要がある。

保護者（特に母親）が授業参観や保護者会の機会に出かけるのに、そう抵抗感はない。しかし、祖父母や関係機関職員、地域関係者、当該校の元教職員などは、学校を訪問する際に一定の「敷居の高さ」を抱く。それは、音楽会、学芸会、展覧会などでもそうであろう。

その一方で、校庭で実施される運動会は開放感もあり、「敷居の低い」機会である。筆者の泰明小学校長時代、児童数360名程度の学校であったが、校庭や校舎観覧席には1,000名を越える観客があり超満員となった。

この機会を捉え、学校の教育活動を公開し、「学校の今」を理解してもらうことで学校応援団の維持と拡張を狙った。運動会の感想を後日のアンケートや来賓からの聞き取りで把握する。

運動会は、学校応援団育成と強化の上で最大の機会であると再認識したい。

7点目は開始時期の検討である。これまで、首都圏の小学校では、5月末か9月末から10月初めに、運動会を実施する学校が多かった。

5月末実施のメリットは、秋に行われることの多い文化的行事や宿泊行事、研究発表会、周年行事などと重ならぬように分散するためである。新年度の学級集団も次第に円滑化し、連休明けの気候の良い時期に練習できる。梅雨入り前の、比較的雨の少ない時期に行える良さがある。その反面、各学年とも大きく成長する夏休み前の実施であり、学年相応の発達の面からみると、演技の力強さに難点がある。

9月末から10月初め実施のメリットは、進級後6か月を経て、その学年にふさわしい成長した姿を見せることができることである。また、「スポーツの秋」のスローガンのように、秋晴れの日の開催は、伝統的な風物詩ともなる。その反面、練習開始時期の9月中旬には残暑が残る。また、9月末から10月初めの時期は、秋雨前線の影響を受けやすく、運動会開催の判断に迷うことが多い。筆者の11年間の秋季運動会開催で、天候判断で悩まなかったのは2か3回である。11回の運動会のうち6回、雨の影響を受けた。

学研キッズネットによれば、2023年度の全国運動会は、春開催51%、秋開催49%である。内訳は、5月37%、6月14%、9月17%、10月31%、11月1%となっている⁽¹⁷⁾。

地域によっては、熱中症予防が大きな課題になる。これまで、幼稚園や保育所が開催していた10月下旬から11月上旬の開催も、地域によっては視野に入れることもできるであろう。その際、他の幼稚園・保育所や学童クラブの行事等との調整も必要になる。

8点目は、運動会練習時間の効率化を図ることである。2024年度、学校の標準時間数の厳密化や過度の余剰時数の見直しが進んでいる。学校の教育目標達成のために、教科等の授業時間数と運動会練習の時間を確保について、学校内で合意形成を図る必要がある。教職員には多様な教育観があるし、前任校での経験等から、練習時間数については、それぞれの主張もあるであろう。

運動会の大綱を決定した後、実施計画で各学年の練習時間を配当する。その際、コロナ禍前の運動会より、1割から2割程度、配当時間数を縮減

させたい。そのためには、運動会前の特別練習期間には、会議や研修等の時間を縮減し、各学年が毎回の練習のリフレクションを行って密度の高い練習が展開できるように工夫することが大切である。また、配当時数を越えて各教科の授業時間を安易に転用するという、これまでの悪しき習慣を是正したい。

9点目は、運動会実施に向けての「チーム学校」の整備である。コロナ禍前に比べて、学校には多様な教職員が着任した。運動会実施に当たって、直接な指導はできないまでも後方で支援する業務にあたることは可能である。用具の準備や整頓、放送や誘導などの補助、運動会実施の業務分担など、管理職が効果的な人材配置を行うことで、教職員の業務を一定程度、縮減させるマネジメントを講じたい。

10点目は家庭との連携である。保護者の多くは、華やかな運動会を体験した世代である。コロナ禍後であっても、かつてのような運動会を期待する声は大きいと推察される。学校は、運動会の趣旨を伝え、保護者がその意図を理解できるような努力をすべきである。また、機会を得て学校評価等のアンケートで、保護者の意向を把握することも大切である。

文科省の第4期教育振興基本計画(令和5年度～9年度)においては、これからの学校教育では、「日本社会に根差した『調和』と『協働』に基づくウェルビーイングを教育を通して向上させていくことが求められる」としている。

コロナ禍後の運動会が、働き方改革や三密回避、児童負担減、熱中症予防などの掛け声のもとに、「安易」に簡素化されていないであろうか。筆者は、これからの運動会を検討する際に、コロナ禍前の運動会を吟味し、地域社会と一体となった運動会の「調和」と「協働」の価値をふまえ、ウェルビーイングに資する内容とするよう期待したい。併せて、学校関係者が「小善は大悪に通ず大善は非情に似たり」という古人の戒めを噛みしめて、運動会の態様を構想することを切に願う。

〈引用・参考文献〉

- (1) 『帝京大学教職大学院年報』 第3号～第11号 2012年7月～2021年7月 帝京大学大学院教職研究科
- (2) 『敬愛大学教育学会紀要』 創刊号～第3号2022年8月～2024年3月 敬愛大学教育学部
- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』 2017年3月 pp183-189
- (4) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 2017年7月 p179
- (5) 山口満『特別活動と人間形成』 学文社1990年 p187
- (6) 浜野兼一『小学校の運動会に関する史的考察—運動会の萌芽期にみる事例分析を通して—』 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 12号-1 2004年9月
- (7) 山崎英則、南本長穂『新しい特別活動の指導原理』 ミネルヴァ書房 2017年 pp184-185
- (8) 前掲書 pp186-188
- (9) 佐々木正昭『学校の祝祭についての考察』『人文論究』 55(1) 2007年 pp52-70
- (10) 前掲書
- (11) 向山行雄『組体操問題と学校教育 —変化する社会と教職の専門性についての一考察Ⅳ—』『帝京大学大学院教職研究科年報』 8号 2017年7月 pp13-14
- (12) 向井一郎『学校だより 令和5年6月号 第211号』墨田区立立花吾妻の森小学校 2023年6月1日
- (13) 『縮小する学校行事』『NHKみんなでプラス』2023年12月8日
- (14) 『教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策 —教師の専門性の向上と持続可能な教育環境の整備を目指して—』中教審初等中等分科会「質の高い教師の確保特別部会」2023年8月28日
- (15) 久保田（河本）愛子『コロナ禍における小学校の運動会の中止・縮小と社会参画意識との関連—学校・家庭要因、運動会での役割発揮を考慮に入れた検討—』日本特別活動学会研究紀要 第31号 2023年3月
- (16) 向山行雄『教職員の働き方改革と学校教育 —変化する社会と教職の専門性についての一考察 その8—』『帝京大学大学院教職研究科年報』 9号 pp31-51 2018年7月
- (17) 『令和の運動会を大調査!』GAKKEN キッズネット 2023年10月